

大学教育における単元構造図を用いた授業設計方法の提案 —体育系大学における「ダンス」の実技授業を例にして—

梶 ちか子¹⁾, 松元 隆秀²⁾, 佐藤 豊³⁾, 金高 宏文⁴⁾

Chikako KAKOI¹⁾, Takahide MATSUMOTO²⁾, Yutaka SATO³⁾, Hirofumi KINTAKA⁴⁾

Abstract

This research aimed to design classes informing students of the university's policies. Accordingly, our goal was devising a unit structure diagram of the university. Our intention was to present the unit to students. We used a unit structure diagram as a guideline, since they are becoming popular in primary and secondary education. The subjects of the research were dance classes (for which the author is responsible) at a physical education university. Using the university's diploma and curriculum policies, our goals were based on the qualities and abilities to be taught in classes. Next, we examined the evaluation criteria of "cognitive domain," "emotional domain," and "skill area," carefully selecting instructional contents. In addition, we developed learning processes for guidance contents, as well as the proper timing of guidance and evaluation. As a result, we clarified the aims and contents of each lesson. In addition, by setting criteria (rubrics) for each category, we further elucidated the unit's contents.

Keywords: diploma policy, curriculum policy, quality assurance of education, visualization of learning outcomes, evaluation criteria, lesson design, a unit structure diagram

要約（和訳）

本研究では、初等中等教育で普及が進んでいる単元構造図を手がかりに、大学のポリシーを意識した授業設計を行うための大学版の単元構造図の作成過程を考案し、その過程を提示することを目的とした。なお、提示する授業科目は、筆者が担当する体育系大学における専門科目の実技科目「ダンス」を対象とした。大学のディプロマポリシー、カリキュラムポリシーをもとに、授業を通して育成すべき資質・能力から到達目標を設定し、「認知的領域」「情意的領域」「技能的領域」それぞれの評価規準を検討して指導内容を厳選した。さらに、学修過程と指導内容、指導と評価のタイミングを同時に作成していくことで、各時間の授業のねらいや指導内容が明確となった。また、評価規準毎の判定基準（ルーブリック）を設定することで、より指導内容と評価内容を明確にした。

キーワード: ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、教育の質保証、学修成果の可視化、評価規準、授業設計、単元構造図

¹⁾ 鹿屋体育大学スポーツ人文・応用社会科学系

²⁾ 東海学園大学スポーツ健康科学部

³⁾ 桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

⁴⁾ 鹿屋体育大学スポーツ・武道実践科学系

I. 研究の背景と目的

近年、大学における教育改革が急速に求められている。学修者^{注1)}を主体とした「個々人の強みを最大限に活かすことを可能とする教育」が重要とされ、「何を教えたか」から、「何を学び、身に付けることができたのか」への転換が更に求められ、教育内容と学修成果との関係が厳しく問われている（中央教育審議会, 2018）。以前の大学で多くみられた学期末試験の成績のみによる評価だけでなく、授業全体を通じての学びの成果の確認（形成的評価）や学びを学生が主体的に確認し、次への学びへと繋げることが求められている。つまり、大学における授業科目の授業設計は体系的・系統的、綿密に行われることが期待されている（中央教育審議会, 2012）。特に、各大学・学部等のディプロマポリシー（学位授与の方針）やカリキュラムポリシー（教育課程の編成・実施の方針）にそって、授業科目の授業目標が設定され、適切に実施、評価されることが求められている

（中央教育審議会, 2008）。そのようなことから、インストラクショナル・デザイン^{注2)}の概念を取り入れたファカルティーディベロップメント研修も行われるようになってきている（根本・鈴木, 2012）。

一方、佐藤（2015）は、大学教育においても初等中等教育における学習指導要領に示された学修課題の体系的・系統的な実践・評価を目指して作成されている「単元構造図」の活用を提案している^{注3)}。この方法は、授業内容の確認、学修過程の具体化、評価規準の設定という一連の授業づくりに必要な過程を図1のように1枚のシート上に示すことができ、学習指導要領の理念と具体的な授業をつなぐための効果的なツールとされている（佐藤・友添, 2011；佐藤, 2014）。この単元構造図による授業検討方式は2006年頃からの国立教育政策研究所指定校事業における研究開発の中で作成がはじまり、これまで多くの初等中等教育の現職教員を対象とした研修や保健体育科教師教育の現場で受け入れられてきている^{注4)}。そして、大

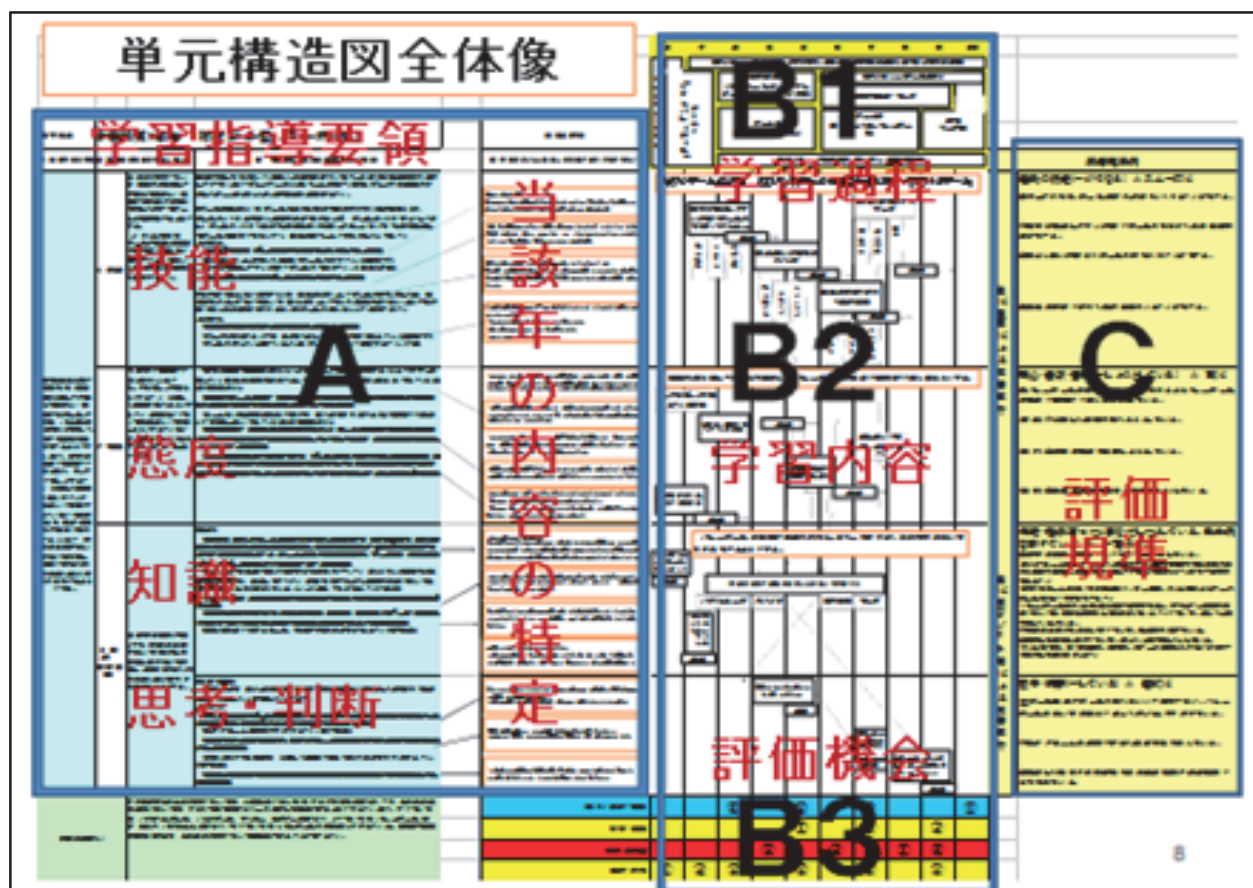


図1 初等中等教育における単元構造図

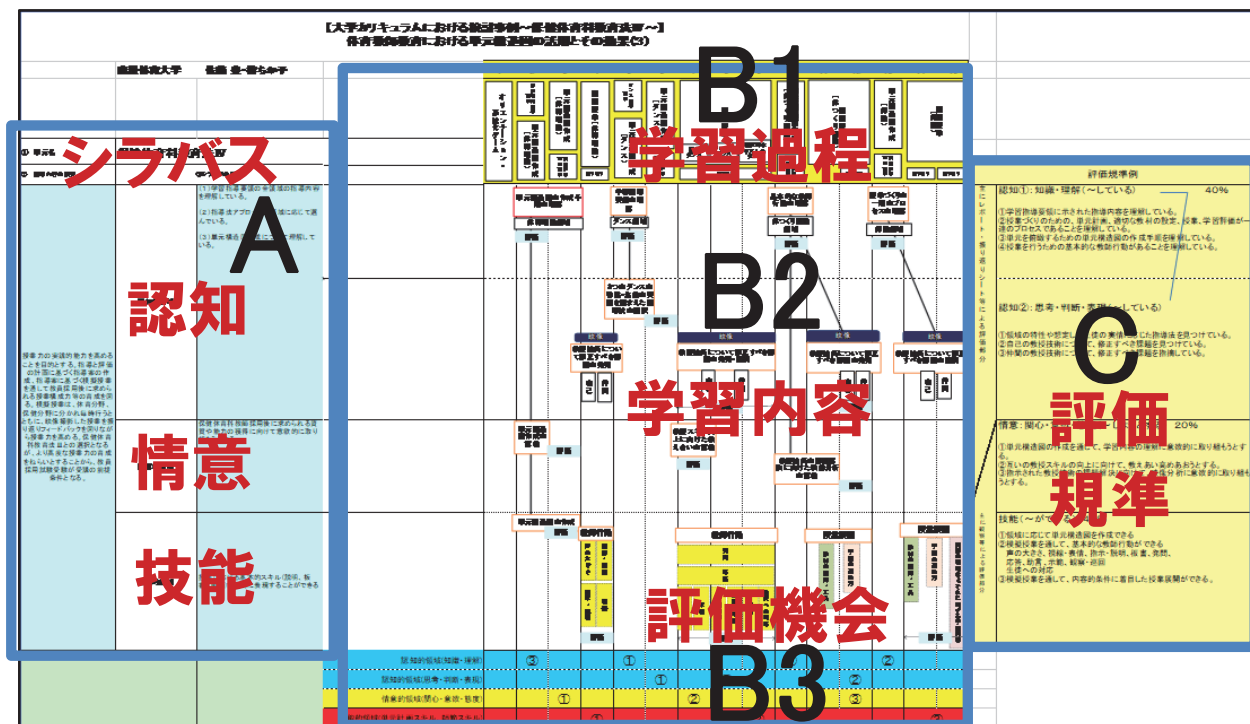


図2 佐藤・梶 (2015) が作成した大学版単元構造図

学教育における単元構造図の活用の先鞭として、鹿屋体育大学の2013年度および2014年度保健体育科教育法Ⅳの授業において、シラバスに基づく単元構造図(図2)の大学授業への導入を行っている(佐藤・梶, 2015; 佐藤・梶, 2016)。しかし、佐藤らの示した大学版の単元構造図は、大学のディプロマポリシーからブレイクダウンして、授業科目の到達目標の設定、評価規準の明確化、授業内容の検討、学修過程の検討をする作成過程を詳細に示していない。大学等で単元構造図が大学教員に活用されるためには、各大学が設定するディプロマポリシー、カリキュラムポリシーから導かれる授業科目の到達目標を手がかりとして、①授業科目の到達目標の設定→②評価規準の明確化→③授業内容の検討→④学修過程の検討といった一連の作成手順が提示され、解説されることが必要と考える。

そこで、筆者らは、初等中等教育で普及が進んでいる単元構造図を手がかりに、大学のディプロマポリシー等を意識した授業設計を行うための大学版の単元構造図の作成過程を考案し、その過程を提示することを目的とした。なお、提示する授

業科目は、筆者が担当する体育系大学における専門科目の実技科目「ダンス」を対象とした。

Ⅱ. 大学版単元構造図の作成過程

筆者らは、大学が設定するディプロマポリシー、カリキュラムポリシーから単元構造図を作成するためには、①授業科目の到達目標の設定→②評価規準の明確化→③授業内容の検討→④学修過程の検討といった一連の作成手順で行うことが出来ると考えた。以下に、体育系大学における専門科目の実技科目「ダンス」の単元構造図の作成過程を示す。

1. ディプロマポリシー等を意識した授業の到達目標の設定

鹿屋体育大学では、教育理念(教育の方針)をもとにディプロマポリシー(学位授与の方針)およびカリキュラムポリシー(教育課程編成・実施の方針)が定められている^{注5)}。さらに、ディプロマポリシーで目指す学修成果と科目群の関係についてもまとめられている(図3)。

「ダンス」授業は、専門性の深化と充実を目指した「専門科目・関連実技科目」に位置づけられ

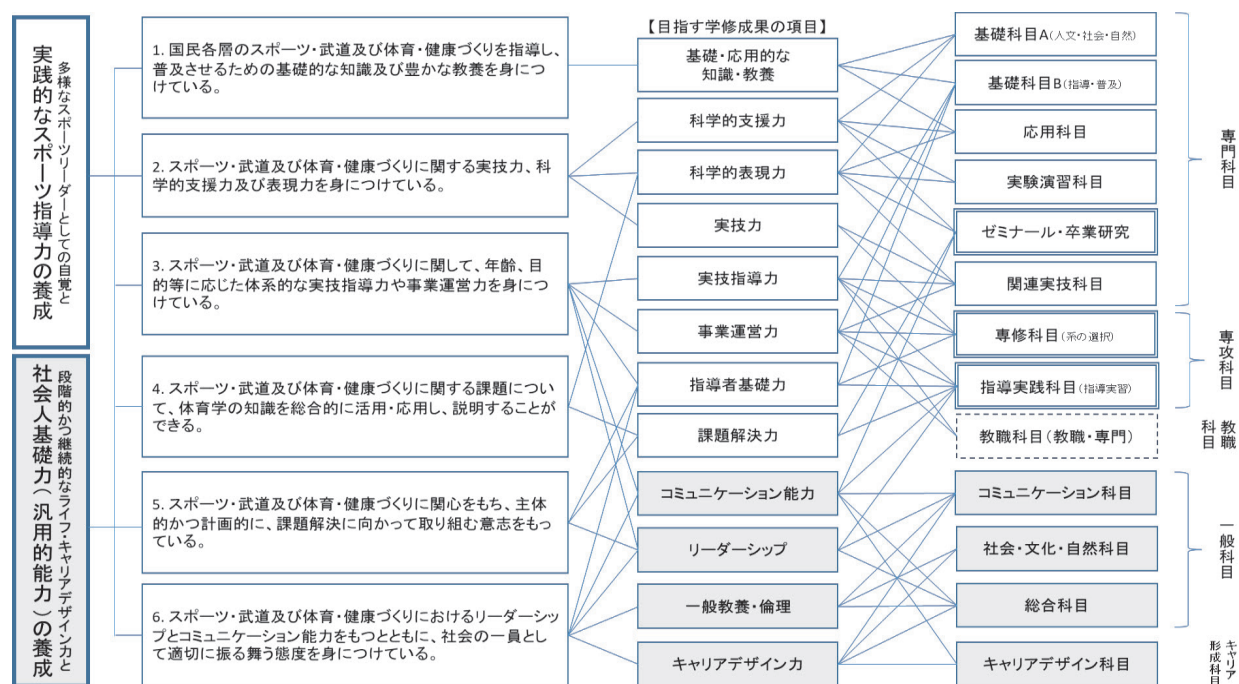


図3 ディプロマポリシーで目指す学修成果と科目群との関係（体育学部履修要項 p. 15より）

ている。この「関連実技科目」は、「スポーツ・武道及び体育・健康づくりを指導し、普及させるための専門的、応用的な内容を身に付ける科目」で、全27科目から成り立っている。「関連実技科目」は、カリキュラムポリシーにおいて、「スポーツ・武道及び体育・健康づくりに関する基礎的な実技力を身に付けるため、選択科目として、修学全期にわたって配置する」とされている。また、ディプロマポリシーの「2. スポーツ・武道及び体育・健康づくりに関する実技力、科学的支援力及び表現力を見につけている」「3. スポーツ・武道及び体育・健康づくりに関して、年齢、目的等に応じた体系的な実技指導力や事業運営力を身に付けている」「4. スポーツ・武道系及び体育・健康づくりに関する課題について、体育学の知識を総合的に活用・応用し、説明することができる」の3項目を特に重点的な目標とし、12の資質・能力のうち「科学的表現力」「実技力」「実技指導力」「事業運営力」の4つの学修成果が期待されている（図3）。さらに2018年度より、科目ごとに目指す資質・能力が示され、「ダンス」については、「実技力」「実技指導力」を重点目標とし、「コミュニケーション能力」と「課題解決力」「専門的な

知識・教養」も意識して目指すこととされた。そこで、「ダンス」の授業の到達目標については、これらの学修成果の達成をねらいとして設定することとした。

また、到達目標の設定にあたっては、「ダンス」授業の実施状況及び履修学生の実態も考慮した。「ダンス」授業の履修は、3年次以降の学生が授業選択に関するオリエンテーションを受講後に選択する。単位数は「1」で、全16コマとなる。本学のカリキュラム編成上「ダンス理論（講義）」等「ダンス」を学ぶ授業は開講されていないため、この実技の「ダンス」授業が唯一の「ダンス」領域を学ぶ科目となる。また、本学の「ダンス」を履修する学生は、①受講生全員がダンス以外を専門としている（入試科目にダンス実技がない）、②中学校の保健体育科教員免許取得希望者の割合が高い（中学校でのダンス領域必修化が影響）、③受講生は男子学生が過半数以上を占める（中学・高等学校でダンス授業の受講経験がほとんどない）、④部活動が同じ学生同士の結束が強い（部活動以外の学校生活全般を部活動が同じ学生同士で過ごす）という特徴がみられた^{注6)}。

鹿屋体育大学では、授業の到達目標および成

梶, 松元, 佐藤, 金高: 大学教育における単元構造図を用いた授業設計方法の提案—体育系大学における「ダンス」の実技授業を例にして—

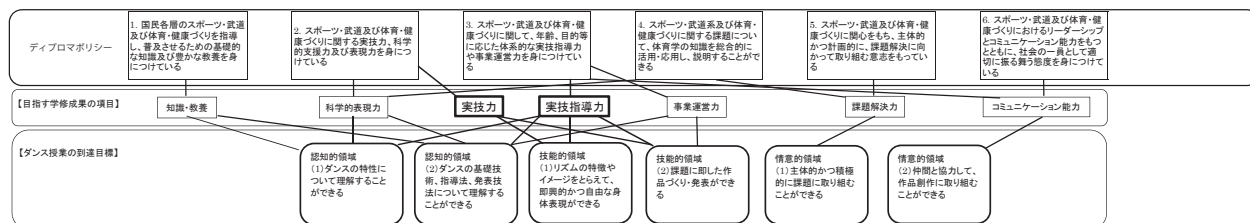


図4 鹿屋体育大学のディプロマポリシー・目指す学修成果の項目・ダンス授業の到達目標の関係

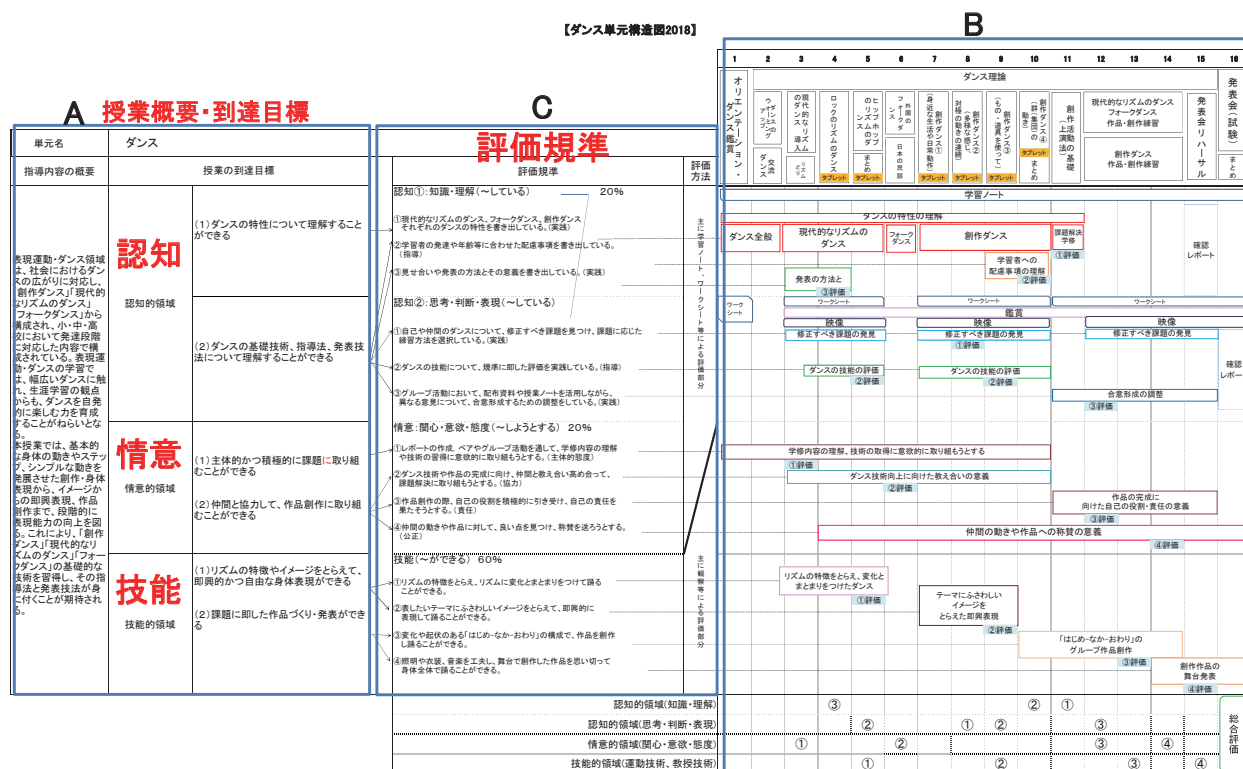


図5 2018年度「ダンス」授業の単元構造図（全体版）

績評価の方法については教育の一般・行動目標（2010, 鹿屋体育大学教育研究評議会決定）において、「認知的領域」、「情意的領域」、「技能的領域」の3領域について、授業の特性を踏まえて学修到達目標を区別するよう定められている。そこで5つの学修成果の達成をねらいとし、ダンス授業においても「認知的領域」、「情意的領域」、「技能的領域」3領域について設定を行った（図4）。

まず、「実技力」の獲得には、技能的領域の「(1) リズムの特徴やイメージをとらえて、即興的かつ自由な身体表現ができる」「(2) 課題に即した作品づくり・発表ができる」を到達目標として設定した。また、「実技指導力」の獲得に関しては、技能的領域の2つの到達目標に加えて、認知的領域の「(1) ダンスの特性について理解することができる」

ことができる」「(2) ダンスの基礎技術、指導法、発表技法について理解することができる」の獲得をねらいとした。また「科学的表現力」「専門的な知識・教養」の獲得をねらいとして、認知的領域についての2つの目標を設定し、「事業運営力」に関しては、認知的領域の(2)、技能的領域の(2)の到達目標を設定した。「課題解決力」の獲得には、情意的領域の「(1) 主体的かつ積極的に課題に取り組むことができる」、「コミュニケーション能力」の獲得には「(2) 仲間と協力して作品創作に取り組むことができる」を示した。

2. 授業設計（単元構造図；図5）の方法の手順

(1) Aゾーン（図6）の作成

単元構造図の左半分部分をAゾーンとする。

単元名	ダンス	
指導内容の概要	授業の到達目標	
表現運動・ダンス領域は、社会におけるダンスの広がりに対応し、「創作ダンス」「現代的なリズムのダンス」「フォークダンス」から構成され、小・中・高校において発達段階に対応した内容で構成されている。表現運動・ダンスの学習では、幅広いダンスに触れ、生涯学習の観点からも、ダンスを自発的に楽しむ力を育成することがねらいとなる。本授業では、基本的な身体の動きやステップ、シンプルな動きを展開させた創作・身体表現から、イメージからの即興表現、作品創作まで、段階的に表現能力の向上を図る。これにより、「創作ダンス」「現代的なリズムのダンス」「フォークダンス」の基礎的な技術を習得し、その指導法と発表技法が身に付くことが期待される。	認知的領域	<p>(1)ダンスの特性について理解することができる</p> <p>(2)ダンスの基礎技術、指導法、発表技法について理解することができる</p>
	情意的領域	<p>(1)主体的かつ積極的に課題に取り組むことができる</p> <p>(2)仲間と協力して、作品創作に取り組むことができる</p>
	技能的領域	<p>(1)リズムの特徴やイメージをとらえて、即興的かつ自由な身体表現ができる</p> <p>(2)課題に即した作品づくり・発表ができる</p>

図6 2018年度「ダンス」授業の単元構造図Aゾーン

初等中等教育の単元構造図(図1)では、Aゾーンは、学習指導要領および解説の内容を記載し理解を進め、授業を行う学年の指導内容の特定を行う箇所となっている。一方、大学版の単元構造図(図5)のAゾーンでは、大学が定めたカリキュラムポリシーやディプロマポリシーに基づいて、学修成果を達成するためのそれぞれの授業についての到達目標を記載する。ここでは「ダンス」授業について設定した、「認知的領域」、「情意的領域」、「技能的領域」3領域の到達目標を記載した(図6)。

(2) BゾーンおよびCゾーンの作成

単元構造図のBゾーンは、初等中等教育においては、学習指導要領の解説の例示から指導内容と実際の具体的な指導内容(練習方法や教材・教具の活用等)の設計を行うエリアである(図1)。Bゾーンは、学習過程の作成を行うB-1エリア、

評価規準	評価方法
<p>認知①:知識・理解(～している) 20%</p> <p>①現代的なリズムのダンス、フォークダンス、創作ダンスそれぞれのダンスの特性を書き出している。(実践)</p> <p>②学習者の発達や年齢等に合わせた配慮事項を書き出している。(指導)</p> <p>③見せ合いや発表の方法とその意義を書き出している。(実践)</p> <p>認知②:思考・判断・表現(～している)</p> <p>①自己や仲間のダンスについて、修正すべき課題を見つけ、課題に応じた練習方法を選択している。(実践)</p> <p>②ダンスの技能について、規準に即した評価を実践している。(指導)</p> <p>③グループ活動において、配布資料や授業ノートを活用しながら、異なる意見について、合意形成するための調整をしている。(実践)</p> <p>情意:関心・意欲・態度(～しようとする) 20%</p> <p>①レポートの作成、ペアやグループ活動を通して、学修内容の理解や技術の習得に意欲的に取り組もうとする。(主体的態度)</p> <p>②ダンス技術や作品の完成に向け、仲間と教え合い高め合って、課題解決に取り組もうとする。(協力)</p> <p>③作品創作の際、自己の役割を積極的に引き受け、自己の責任を果たそうとする。(責任)</p> <p>④仲間の動きや作品に対して、良い点を見つけ、称賛を送ろうとする。(公正)</p> <p>技能(～ができる) 60%</p> <p>①リズムの特徴をとらえ、リズムに変化とまとまりをつけて踊ることができる。</p> <p>②表したいテーマにふさわしいイメージをとらえて、即興的に表現して踊ることができる。</p> <p>③変化や起伏のある「はじめなか-おわり」の構成で、作品を創作し踊ることができる。</p> <p>④照明や衣装、音楽を工夫し、舞台上で創作した作品を思い切って身体全体で踊ることができる。</p>	<p>主に学習ノート、ワークシート等による評価部分</p> <p>主に観察等による評価部分</p>

図7 2018年度「ダンス」授業の単元構造図Cゾーン

評価観点(関心・意欲・態度、思考・判断、技能、知識・理解)ごとに具体的な指導内容を配置するB-2エリア、評価のタイミングを検討するB-3エリアに分類される。Cゾーンは、国立教育政策研究所が示す評価規準(2011, 2012)や学習指導要領の解説の例示をもとに作成し、Bゾーンの指導内容との整合性や精度を確認するために用いられる。

一方、大学版の単元構造図(図5)では、学習指導要領解説における例示など、定められた指導内容がないため、Aゾーンで示した3領域の到達目標(図6)から指導内容および実際の授業展開の中で用いる練習方法や教材・教具などを教員側で考え、整理を行う必要がある。そこで、我々は指導内容を選定するにあたり、まずはAゾーンの「認知的領域」、「情意的領域」、「技能的領域」の3領域の学修到達目標をもとに、Cゾーンの評価規準を考え作成した(図7)。

まず、「認知的領域」については、1 領域を先行研究（佐藤・梶, 2015; 佐藤・梶, 2016）と同様に、「知識・理解」（浅い理解）と「思考・判断・表現」（深い理解）に分類して作成した。「到達目標（1）ダンスの特性について理解することができる」については、「知識・理解」領域に分類し、評価規準は「現代的なリズムのダンス、フォークダンス、創作ダンス、それぞれのダンスの特性を書き出している」とした。「到達目標（2）ダンスの基礎技術、指導法、発表技法について理解することができる」については、「知識・理解」「思考・判断・表現」の2 領域に分類し、「知識・理解」については、「学習者の発達や年齢等に合わせた配慮事項を書き出している」「見せ合いや発表の方法とその意義を書き出している」の2つの評価規準を設定した。「思考・判断・表現」については、「自己や仲間のダンスについて、修正すべき課題を見つけ、課題に応じた練習方法を選択している」「ダンスの技能について、規準に即した評価を実践している」「グループ活動において、配布資料や授業ノートを活用しながら、異なる意見について、合意形成するための調整をしている」の3つの評価規準を作成した。さらにそれぞれの評価規準について、学生自身の実践に関わる事項には「実践」、指導に関わる事項には「指導」という語を追記した。

「情意的領域」については、「到達目標（1）主体的かつ積極的に課題に取り組むことができる」について、評価規準を「レポートの作成、ペアやグループ活動を通して、学修内容の理解や技術の習得に意欲的に取り組もうとする」という「主体的態度」を設定した。「到達目標（2）仲間と協力して作品に取り組むことができる」については、「ダンス技術や作品の完成に向け、仲間と教えあい高めあって、課題解決に取り組もうとする」という「協力」に関する事項と、「責任」に関する「作品創作の際、自己の役割を積極的に引き受け、自己の責任を果たそうとする」、「公正」に関連した「仲間の動きや作品に対して、良い点を見つけ、

称賛を送ろうとする」の3つの評価規準を設定した。

「技能的領域」については、「到達目標（1）リズムの特徴やイメージをとらえて、即興的かつ自由な身体表現ができる」に対する評価規準は、「リズムの特徴をとらえ、リズムに変化とまとまりをつけて踊ることができる」「表したいテーマにふさわしいイメージをとらえて、即興的に表現して踊ることができる」の2つを設定した。また、「到達目標（2）課題に即した作品づくり・発表ができる」については、「変化や起伏のある『はじめ—なか—おわり』の構成で、作品を創作し踊ることができる」「照明や衣装、音楽を工夫し、舞台で創作した作品を思い切って身体全体で踊ることができる」の2つの評価規準を設定した。

「指導」と「評価」は表裏一体であることから、評価規準の設定は、授業内の指導内容の特定へと導かれる。そこで、初等中等教育で用いられているCゾーンを大学版単元構造図では、Aゾーンの到達目標の右隣に位置づけ、B-2ゾーンに至る一連の流れを矢印で示すことで、どの到達目標から派生した評価規準および指導内容なのかを明示できるようにした（図5）。

次にBゾーンについて、評価規準から指導内容を特定し（B-2ゾーン）、学修過程（B-1ゾーン）と併せて作成を行った（図5、図8）。本学のカリキュラムや学生の実態を考慮した上で、「認知的領域」については、授業の前半にダンスの基礎的知識（特性や歴史、関連して高まる体力、上演法など）を指導する「ダンス理論」の時間を確保した。また、「情意的領域」部分の指導内容については、単元全体を通して、同じ学生同士が毎時活動を共にしないよう、アクティブ・ラーニング型のグループワークを中心に授業を構成することで実現を試みた。「技能的領域」は、単元前半に、踊る恥ずかしさの払拭を狙いとして、「リズムに乗って踊る」という人間の本能的・根源的なダンス（村田・松本, 2004）である「現代的なリズムのダンス」を配置した。この「現代的なリズムの

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
オリエンテーション・ダンス鑑賞	ダンス理論														発表会（試験） まとめ
	ウダンスのグ ダンス交流	の現代的なリズム 導入 リズム	ロックのリズムのダンス タブレット	のヒップホップ リズムのダンス タブレット	外国の フォークダンス 日本の民謡	（身近な生活や日常動作） 創作ダンス① タブレット	（多様な感じ、 対極の動きの連続） 創作ダンス② タブレット	（もの・道具を使って） 創作ダンス③ タブレット	創作ダンス④ （群・集団の動き） タブレット まとめ	創作（上活動法） の基礎	現代的なリズムのダンス フォークダンス 作品・創作練習	創作ダンス 作品・創作練習		発表会リハール	
学習ノート															
ダンスの特性の理解															
ダンス全般	現代的なリズムのダンス			フォークダンス	創作ダンス			課題解決学修	確認レポート						
	発表の方法と ③評価						学習者への配慮事項の理解 ②評価	①評価							
ワークシート	ワークシート				ワークシート			鑑賞	ワークシート						
	映像 修正すべき課題の発見			映像 修正すべき課題の発見 ①評価			映像 修正すべき課題の発見			確認レポート					
	ダンスの技能の評価 ②評価			ダンスの技能の評価 ②評価			合意形成の調整 ③評価								
学修内容の理解、技術の取得に意欲的に取り組もうとする															
	①評価			ダンス技術向上に向けた教え合いの意義 ②評価			作品の完成に向けた自己の役割・責任の意義 ③評価								
仲間との動きや作品への称賛の意義 ④評価															
リズムの特徴をとらえ、変化とまとまりをつけたダンス ①評価															
テーマにふさわしいイメージをとらえた即興表現 ②評価															
「はじめ-なか-おわり」のグループ作品創作 ③評価															
創作作品の舞台発表 ④評価															
	③			②			①	②		③			④		
	①				②					③				④	
			①				②				③			④	
															総合評価

図8 2018年度「ダンス」授業の単元構造図Bゾーン

現代的なリズムのダンス【ワークシート1】

学籍番号	氏名
------	----

＜ワーク＞ タブレットを使ってダンスを撮影してみよう

自分達ペア ロック 友だちペア	1回目		2回目	
	評価: A・B・C	評価: A・B・C	評価: A・B・C	評価: A・B・C
	評価の理由とアドバイス		評価の理由とアドバイス	
	評価の理由とアドバイス		評価の理由とアドバイス	
	評価の理由とアドバイス		評価の理由とアドバイス	

●タブレットで撮影した映像を見て、以下の質問に答えてください。() に数字を入れてください。
 【とても思う：5、少し思う：4、どちらでもない：3、あまり思う：2、そう思わない：1】

1. 自分達のダンスを客観的に観察することは、技能の改善に有効であった	()
2. 仲間達のダンスを客観的に観察することは、技能の改善に有効であった	()
3. 踊っている間には気づかなかったが、映像視聴によって新たに発見できたことがあった	()
4. 自分や仲間達のダンスについて観察・評価することで、ダンスの技能評価について理解できた	()

「ダンス①」学習ノート

2018 年前期 3 限

学生番号	氏名	教員免許取得: 予定 ・ 予定なし
------	----	-------------------

★ 今日の授業について質問します。下の 1～10 についてあなたはどのように思いましたか？

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1 深くもに考えることや、感動することがありましたか。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2 今まででできなかったこと（動き・友だち作り等）ができるようになりましたか。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3 「あっ、わかった！」とか「あっ、そうか」と思ったことがありましたか。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4 一緒に、全力をつくしてダンスを踊ることができましたか。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5 楽しかったですか。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6 恥ずかしがらず堂々と踊れましたか。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7 自分から進んで学習することができましたか。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8 自分から進んで学んで仲間と練習できましたか。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9 友だちと協力して、仲良く学習できましたか。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10 友だちとお互いに教えたり、助けたりしましたか。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

★ 今日の授業のポイントと、新たな発見や気づきを書き留めておきましょう。

日時	今日の授業で学んだこと・学習のポイント	授業を通して新たに学んだこと、気づいたこと
① /		
② /		
③ /		
④ /		
⑤ /		
⑥ /		
⑦ /		
⑧ /		

図9 ワークシート・学習ノートの一例

ダンス」は、ダンス初学者でも取り組みやすく、今の学生たちにも馴染みが深い。また、現在、全国的に学校現場でも最も多く取り扱われている（中村，2013；茅野，2013；熊谷・中川，2014）。「フォークダンス」の授業を挟んで、単元の後半では、「現代的なリズムのダンス」に次いで学校現場での取組が多い「創作ダンス」の即興表現を中心とした授業を4コマ行った後、16回目の「ダンス発表会」に向けての作品創作活動を中心とした授業展開とした。

具体的な指導内容と評価の設計について、「認知的領域：思考・判断・表現」の「ダンスの技能について、規準に即した評価を実践している」という項目を例に示す。規準に即した評価ができるようになるために、どのような教材や教具を用いて、どのような授業展開を用いれば良いのかについて検討を重ねた結果、本学では、タブレット必携化を実施しているため、タブレットを用いて動きを撮影し、その動きについて評価する活動を入れることとした。また、その評価活動をグループワークとし、ディスカッションの時間を設けるこ

とで、アクティブ・ラーニング型の授業を展開し、「情意的領域」の「主体的態度」や「協力」の指導も行うことができる。さらにそのグループワークを行う際に活用する「ワークシート」や「学習ノート」も作成させ、評価の際にも活用できるように工夫した（図9）^{注7)}。また、この活動は、中学校・高等学校の「ダンス」領域で多く扱われている「創作ダンス」「現代的なリズムのダンス」の授業時に行うように設定した。

以上のように、評価規準から導き出されたひとつひとつの指導内容について、学修過程と照らし合わせながら、具体的な授業の指導場面に当てはめていく作業を繰り返し行い、評価規準（Cゾーン）、学修過程（B-1ゾーン）、指導内容（B-2ゾーン）の整合性を図った。

学修過程（B-1ゾーン）と指導内容（B-2ゾーン）がある程度確定できた後、B-3ゾーンの「評価のタイミング」について検討を行った。評価については、学生の学修状態の把握および質保証を目的とする「形成的評価」を単元の途中に、科目の最終的な成績につながる「総括的評価」を最後

			判定基準		
			A	B	C
認知的 領域	知識・理解	①現代舞のバリエーション、フォーダンス、群舞ダンス それぞれのダンスの特性を書き出している(実演)	それぞれのダンスについて、異体例のダンスが特徴を記している	それぞれのダンスについて学習した内容を記している	それぞれのダンスについて学習した内容を記している学習した内容を記している
		②書き合いや発表の方法とその意義を書き出している(実演)	書き合いや発表の仕方について、学習した内容を記している学習した内容を記している	書き合いや発表の仕方について学習した内容を記している書き合いや発表の仕方について記している	書き合いや発表の仕方について、異体例や意義を記している
	思考・判断・表現	③学習者の発意や創作等に合わせた記述事項を書き出している(指導)	学習したすべての記述事項について異体例を挙げている(記述)	学習した記述事項について記述している	学習した記述事項について記述している
		④自己や仲間とのダンスについて、修正すべき課題を挙げて、課題に応じた練習方法を述べている(実演)	自己や仲間とのダンスの課題について、修正すべき課題を挙げて、適切な練習方法を述べている	自己や仲間とのダンスの課題について指摘し、適切な練習方法を述べている	自己や仲間とのダンスの課題を挙げてきて、課題をもって習得できている
思考・判断・表現		⑤ダンスの発展について、将来に向けた計画を述べている(指導)	技術的進歩に関して、具体的な課題を設定し、計画を策定している	技術的進歩に関して、評価を策定している	技術的進歩に関してしに評価を策定している
		⑥グループ活動において、役割や音や道具ノイズを活用しながら、異なる意見を出している、合意形成したものの認識を述べている(実演)	役割やノイズを活用しながら、異なる意見を出している、異体例の意見を書き合いつづけるグループ間の意見を記している	役割やノイズを活用しながら、グループ間の意見を記している	役割やノイズを活用しながら、グループ間の意見を記していない

図10 2018年度「ダンス」授業の判定基準（ルーブリック）

の1コマの授業に設定した。単元途中の評価のタイミングは、初等中等教育の単元構造図と同様に、観察評価が主である「情意的領域」「技能的領域」については、指導したその日の即時評価は実施せず、数コマの学修継続を保障してから評価するよう設定した。例えば、「技能的領域」の「リズムの特徴をとらえ、変化とまとまりをつけて踊る」指導は3時間目から行ったが、その評価については5時間目の現代的なリズムのダンスの「まとめ」の時間に行った。実際の授業では教員1名で指導と評価を行わなければならない。従って、1日に多数の評価観点を設けることは教員にとって大きな負担となる。そこで、観察評価が主である「情意的領域」「技能的領域」については、1コマ内で評価観点が重複しないよう配慮した。一方、「認知的領域」については、基本的には指導した日に理解度を確認するため、「学習ノート」や「ワークシート」を用いて即時評価できるように設定した。これらの形成的評価では、主に習熟度の低い学生を把握し、その後の授業で重点的にフォローを行い、単元最後の総合評価に向けて、学修の質をクラス全体で高められるように意識した。

最後に評価の割合を検討した。「知識・理解」は、各評価規準4点×3項目=12点、「思考・判断・表現」は、①2点、②4点、③2点とし計8点で認知的領域は20点とした。情意的領域は各評価規準5点×4項目=20点、技能的領域は各項目15点ずつで60点とした。

		判定基準		
		A	B	C
情意的 領域	関心・意欲・態度	<p>「レコー」の作成、グループ活動を通して、学習内容の理解や他者の意見に積極的に参加する態度（主体的態度）を示している。</p> <p>グループ活動の中心に立って、仲間をリードし、仲間を助ける態度を示している。</p>	<p>学習内容の理解や他者の意見に積極的に参加する態度を示している。</p> <p>仲間を助ける態度を示している。</p>	<p>学習内容の理解や他者の意見に積極的に参加する態度を示している。</p>
	関心・意欲・態度	<p>グループ活動の中心に立って、仲間をリードし、仲間を助ける態度を示している。</p> <p>グループ活動の中心に立って、仲間を助ける態度を示している。</p>	<p>グループ活動の中心に立って、仲間を助ける態度を示している。</p> <p>グループ活動の中心に立って、仲間を助ける態度を示している。</p>	<p>グループ活動の中心に立って、仲間を助ける態度を示している。</p>
	関心・意欲・態度	<p>グループ活動の中心に立って、仲間を助ける態度を示している。</p> <p>グループ活動の中心に立って、仲間を助ける態度を示している。</p>	<p>グループ活動の中心に立って、仲間を助ける態度を示している。</p> <p>グループ活動の中心に立って、仲間を助ける態度を示している。</p>	<p>グループ活動の中心に立って、仲間を助ける態度を示している。</p>
	関心・意欲・態度	<p>グループ活動の中心に立って、仲間を助ける態度を示している。</p> <p>グループ活動の中心に立って、仲間を助ける態度を示している。</p>	<p>グループ活動の中心に立って、仲間を助ける態度を示している。</p> <p>グループ活動の中心に立って、仲間を助ける態度を示している。</p>	<p>グループ活動の中心に立って、仲間を助ける態度を示している。</p>
技能的 領域	技能	<p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p> <p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p>	<p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p> <p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p>	<p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p>
	技能	<p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p> <p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p>	<p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p> <p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p>	<p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p>
	技能	<p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p> <p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p>	<p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p> <p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p>	<p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p>
	技能	<p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p> <p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p>	<p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p> <p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p>	<p>制作活動の中心、自分の役割を積極的に果たし、自己の責任を全うしている。</p>

3. 判定基準（ルーブリック）の作成（図10）

評価規準毎にそれぞれの判定基準を A・B・C 評価の 3 段階で作成した。認知的領域は主に学習ノートやワークシート、レポートの内容から評価できるよう、具体的な内容を判定基準とした。情意的領域と技能的領域は、観察評価ができるよう、見るポイントを詳細に示すよう工夫した。

Ⅲ. まとめにかえて

本稿では、初等中等教育で用いられている単元構造図に基づき、大学版の単元構造図の作成過程を提示した。大学が定めたポリシーをもとに、授業を通して育成すべき資質・能力から到達目標を設定し、それぞれの領域ごとに評価規準を検討することで、指導内容を厳選した。さらに、学修過程と指導内容、指導と評価のタイミングを同時に作成していくことで、各時間の授業のねらいや指導内容が明確となった。また、評価規準毎の判定基準（ルーブリック）を設定することで、より指導内容と評価内容を明確にした。

今後は、本稿を参考に、このような大学版の単元構造図の作成過程が他の教員にも理解され、活用できるかについて検証されることが期待される。

注1) 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて－生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ－」(2012)において、「大学設置基準上、大学での

学びは『学修』としている。これは、大学での学びの本質は、講義、演習、実験、実習、実技等の授業時間とともに、授業のための事前の準備、事後の展開などの主体的な学びに要する時間を内在した『単位制』により形成されていることによる」とあることから、本論文では、大学授業における「学び」に関しては、「学修」という語を用いた。

注2) インストラクショナル・デザイン (Instructional Design) とは、教育活動の効果・効率・魅力を高めるための手法を集大成したモデルや研究分野、またはそれらを応用して学修支援環境を実現するプロセスを指し、日本では e-learning の普及とともに注目度が高くなった (鈴木, 2005)。

注3) 公益社団法人全国大学体育連合が主催する第3回大学体育研究フォーラムにおいて、大学体育授業における授業設計方法のワークショップ「単元構造図の大学体育授業改善への活用」が開催された (佐藤, 2015)。さらに2016年の日本体育科教育学会ラウンドテーブルでは「大学版単元構造図に基づく授業設計の試み」としてワークショップが開催されアウトカムを保証する授業設計について意見交換が行われている (佐藤ほか, 2017)。

注4) 佐藤 (2015) は単元構造図方式による授業検討ツールの開発動機について、初等中等教育においての目標に準拠した評価及び観点別学習状況による学習評価の導入という形で、教育課程審議会答申、2000年による論議、2001年4月の初等中等局長通知による各県の指導要録の様式の変更、国立教育政策研究所による「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」の公表によって、各都道府県教育委員会が推進を図るようになり、指導と評価の一体化を具体的にどのように研修していけばよいかという課題に直面したことを挙げている。その後、「単元構造図」は、2006年からの国立教育政策研究所指定校事業における各研究開発校の

「指導と評価の計画」作成プロセスにおける開発的運用にはじまり、全国子どもの体力向上指導者研修 (中央研修) の講師参考資料 (2010～2013)、日本体育科教育学会ラウンドテーブル (2008)、月刊「中等教育」(2010) 等で公表され、大学関係者、各県の指導主事や授業者と共に作り上げ修正を図り、2014年の日本体育科教育学会ラウンドテーブルで、「体育教師教育における単元構造図の活用」として公開された (佐藤, 2015)。

注5) 鹿屋体育大学におけるディプロマ・ポリシー (学位授与の方針) およびカリキュラムポリシー (教育課程編成・実施の方針) は、履修要項に明記され、また、大学の HP に公開されている。

鹿屋体育大学 ディプロマ・ポリシー <https://www.nifs-k.ac.jp/faculties/pe/intro.html>

鹿屋体育大学 カリキュラムポリシー <https://www.nifs-k.ac.jp/faculties/pe/pe-curriculum-policy.html>

注6) 関連実技科目「ダンス」の授業者は、指導教員1名とTA1名で、指導教員は、舞踊教育学を専門とし、保育士養成校3年、大学教員9年のダンス授業の指導経験を持ち、中学校や高等学校においてもダンス授業指導の経験を有していた。TAは、博士課程後期1年次に在籍し、ダンス授業TA歴2年であった。

注7) 図9の「ワークシート」は、「認知的領域: 思考・判断・表現」の評価規準である「ダンスの技能について、規準に即した評価を実践している」の形成的評価に活用した。また、「学習ノート」の記入の際には、時間毎にその日に学修した内容に即するテーマを課し (例えば「現代的なリズムのダンスの技能の特性や評価のポイント」「グループ活動に意欲的に取り組めたか、また意欲的に取り組んだことで学んだこと、気づいたこと」等)、その記述内容を形成的評価を行う上での参考とした。

文献

- 茅野理子 (2013) 栃木県学校体育におけるダンス指導の現状と課題について－ダンス必修化に関するアンケート調査から－. 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 36: 25-32.
- 中央教育審議会 (2008) 「学士課程教育の構築に向けて (答申)」
- 中央教育審議会 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて－生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ－ (答申)」
- 中央教育審議会 (2014) 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 大学入学者選抜の一体的改革について－すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために－ (答申)」
- 中央教育審議会 (2018) 「今後の高等教育の将来像の提示に向けた中間まとめ」
- 国立教育政策研究所 (2011) 評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料 (中学校保健体育). 教育出版株式会社.
- 国立教育政策研究所 (2012) 評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料 (高等学校保健体育). 教育出版株式会社.
- 熊谷佳代・中川裕紀子 (2014) 岐阜県の中学校におけるダンス授業の現状と課題. 岐阜大学教育学部研究報告教育実践研究, 16: 21-28.
- 村田芳子・松本昌代 (2004) 生涯学習に向けた「リズムダンス」・「現代的なリズムのダンス」の学習指導に関する縦断的研究. 日本女子体育連盟学術研究, 21: 21-44.
- 中村恭子 (2013) 日本のダンス教育の変遷と中学校における男女必修化の課題. スポーツ社会学研究, 21(1): 37-51.
- 根本淳子・鈴木克明 (2012) FD ワークショップ実践報告 デザイン力向上の支援を目指して. 日本教育工学会第28回大会 (長崎大学) 発表論文集, 9: 967-968.
- 佐藤豊・友添秀則 (2011) 楽しい体育理論の授業をつくろう. 大修館書店, 121-171.
- 佐藤豊 (2014) 単元構造図を活用して指導計画を作成する. 中学保健体育科ニュース, 1: 4-6.
- 佐藤豊 (2015) 単元構造図の大学体育授業改善への応用. 第3回大学体育研究フォーラムプログラム・抄録集, 34-40.
- 佐藤豊・梶ちか子 (2015) 単元構造図, 模擬授業, 映像視聴の連続体験による体育科教員養成授業モデルの検討－鹿屋体育大学における2013年度保健体育科教育法Ⅳの授業実践とその省察から－. 鹿屋体育大学学術研究紀要, 51: 11-24.
- 佐藤豊・梶ちか子 (2016) 鹿屋体育大学における2014年度保健体育科教育法Ⅳの授業実践とその省察－体験学習モデルに基づくアクティブ・ラーニング型授業における実践的指導力育成システムの構築に向けて－. 鹿屋体育大学学術研究紀要, 52: 35-67.
- 佐藤豊・友添秀則・吉野聡・本多壮太郎・高橋修一・大越正大・木原慎介・梶ちか子 (2017) 大学版単元構造図に基づく授業設計の試み (ラウンドテーブル報告). 体育科教育学研究, 33(1): 67.
- 鈴木克明 (2005) e-Learning 実践のためのインストラクショナル・デザイン. 日本教育工学会論文誌, 29(3): 197-205.